

## 市民と市長のまちかどトーク 市長あいさつ及び開催テーマの概要説明（概要）

- 日 時：平成22年8月29日（日）午後2時30分～午後4時00分
- 場 所：ロビンソン小田原店 4階ギャラリー
- 参加者：80名

皆さん、こんにちは。小田原市長の加藤憲一です。8月の終わりの大変暑い日曜日の午後、何かとお忙しいところ、「市民と市長のまちかどトーク」にお越しいただきまして、ありがとうございます。

この「市長と市民のまちかどトーク」は、例年2回開催しており、1回はこのロビンソン小田原店で行い、2回目は小田原ラスカを会場に開催する予定である。

私が市長に就任して3年目になる。過去2年間の当懇談会のテーマは、総合計画を作っていく考え方、自治基本条例、ケアタウンなど大きな概念の話について、またこれから進めていく小田原市の政策的な方向性についての話など、やや皆さんになじみの薄いテーマだったかもしれない。今日は敢えて具体的な取り組みである、「生（いき）ごみ小田原プロジェクト」というテーマについて皆さんと意見交換をし、今後の動きを作っていきたいと考えている。

小田原市のごみの資料が配られているが、グラフからわかるとおり、細かな分別をして、市民の皆さんのご協力をいただいた結果、燃せるごみの量が減っている。ただ、燃せるごみの中で、生ごみなど、資源として活用できるものが4割ほど占めている、ごみ処理の費用は年間30億円かかっており、可燃ごみにかかる費用は、22億円と計算されている。単純に計算すると8億円が生ごみの処理に使われている。生ごみはわたしたちの生活から切っても切れないものなので、生ごみをいかに減らし、浮いた税金をいかに地域に返していくかがわたしたちのテーマである。

久野の環境事業センター・焼却場は、耐用年数がある。どれくらい燃す必要があるのか、1割、2割の生ごみを削減することで億単位の設備費が浮く。単に、生ごみが土に返るのではなく、行政全般のコストに関わるテーマでもある。可燃ごみの最も大きな構成比を占める生ごみをどうやって資源化していくかは、大きな政策分野として取り組んできた。また、市民の皆さんによる検討委員会を立ち上げ、大変熱心な議論をしていただいた。わたしたち職員も、ごみ処分のテーマに関してはエキスパートだが、生ごみを資源化することは、むしろ民間の中で取り組んでいらっしゃる知恵がある。これを集約し、段ボールという身近な素材を使った地域単位の堆肥化など、小田原の一番ふさわしいやり方を見つけていこうと、市民の皆さんが主体となって議論していただいている。

今回生ごみの資源化については、ごみ処理をどうやって適正に処理するかという問題がまず基本にある。同時に小田原市のコストをどれだけ減らせるかという効果も期待される。これを資源化した後に土や畑に返していく、あるいは庭先のプランターに入れていくこと

で、花や緑に還元していく。地域内循環や花と緑のまちづくりに繋がっていくわけでもある。そういったごみを出すご家庭や事業所で最小化する取り組みは、市民の皆さん自身によるまちづくりの取り組みでも、このテーマは重要である。

現在いくつものテーマを含みながらこの業務を進めている。段ボールコンポストによる堆肥化を市内全域の1,000名にお願いしたところ、約800名の方が手を挙げていただいた。わたしも段ボールコンポストをベランダでやっており、毎日一喜一憂している。体験の中で気づきや喜び、効果がある。今日は、市民の皆さんの口から直接お伝えいただき、この場から段ボールコンポストに参加さしてくださる方が増え、地域の中で広めていただく方向に進んでいけば、ありがたく思う。

今日はどうぞよろしくお願いいたします。